

長島輪中の形成と一向一揆に関する一考察

木曾三川下流部の土地形成

現在は、木曾・長良・揖斐の木曾三川が分流され、伊勢湾に注いでいるが、もともとのこの地域の土地形成は、これらの川が土砂を堆積させ形成したものである。洪積世においては、伊勢湾が濃尾平野の奥深くまで入り込んでおり、現在でも平野部の山際においては海の生物の化石が見つけられている。では、この地域の土地形成が行われたのは何時ごろであったのかということについては、現在の考古学の成果からでも推定される縄文時代の海岸線や弥生時代の海岸線等から見ても一見、徐々に北から南に向かい土地形成が行われていったように見えるが、実際には発掘された遺跡をたどっていくという手法が用いられており、単純に海岸線というような線でつながるようなものではなかったと推定される。これは江戸期の絵図から見ても明らかなように河口部の土地形成は、干潟上のものが点在して言っているため、海岸線というよりは点状の入り組んだ海岸を形成していたものと思われる。そこで堆積した土砂に集落が形成され始めると、必然的に堤防が作られることになる。江戸期の記録を見ても中州が形成されると、資本が投入され、堤防が形成され、新田輪中が完成する。この時点において堤防の内側（堤内地）は、水路と遊水地など土地活用ができない部分を除いてすべて水田として開発され、居住地として土地は、水田として使用できず、また、中州の中で最も高く水害の危険性の少ない堤防上が当てられることになる。これは近代まで続くことになる。これらの痕跡は、現在の地図においても確認することができる。

古図から見た土地形成

中世以前に描かれた木曾三川下流域だけの絵図の存在が明らかになれば、土地形成の進行状況がより明らかなものになると思われるが、現在のところ信憑性のあるものの存在自体ほとんどない。このため参考となるものがないため、長島町史に描かれている古図を参考に考えてみる。（図1）から現在の長島や木曾岬付近が描かれているが、現在の大字程度の地名が記されている。木曾三川の輪中の形成にもかかわってくるが、ここから考えられることは、各島が後に輪中を形成していったものと考えられる。室町期に現在定義されているような懸け回し堤が形成されていたかどうかはわからないが、その元になるようなものが存在していたことだけは明らかである。実は、長島古今図考記によれば、元和年間の長島輪中の図を見るとすでに（図1）の島が七つの輪中を形成していたことが書かれている。また、同じ元和年中にはこれらの七輪中が一輪中にまとめられている。現在の集落の状況を照らし合わせてみると、長島では鰻江川上流の旧集落や木曾岬では上流部分に当てはめることができ、中洲が発達したものが大字程度の小輪中を形成し、それらが複合輪中化し、長島輪中などを形成していったものと考えられる。だから、長島輪中の上流部の旧集落については、室町期に形成された集落と考えられ、これらが懸け回し堤であれば、輪中の形成はその頃ま

でさかのぼることになる。

輪中の土地利用

輪中の形成から考え、その土地利用は、水田の開発にあったものと思われる。水の利用からも、中洲または丘陵下の堆積地においては、堤防の完成後、天井川化が始まり、堤内地と河川の水面との逆転現象が起こり、堤内への入水は容易になるものの、その排水は困難なものになる。このため入水に対してはあまり多くないが数箇所できたが、排水に関してはさまざまな場所において樋門や樋管を通して、逆サイホンなどとともいろいろな工夫が解かされている。つまり、輪中内においては、そのほとんどが水田であり、多くのところで長期にわたる冠水化現象がおきていたわけである。しかし、冠水による多量の水は同時に渇水期（秋から春にかけての冬季）の裏作栽培に適していることになる。江戸期には菜種の栽培が盛んになることからこのことがこの地域における大きなメリットになったことは想像に難くない。これらのことから木曾三川下流域が過去現在を通して、穀物等の栽培に適しており、とくに稲作における水の確保については、他所では近年まで水不足になると水争いがおこったり、旱魃になると収穫が激減すること言うことがあったのとは裏腹に、洪水さえなければ収穫が約束された地であったと同時に、洪水によって上流から多量の土砂が流入することで、河川の氾濫は河口部においては、豊作が約束されるものであった。なお、江戸期には長島藩において長島輪中のほぼ中央部に東西にわたる井桁が作られ、輪中内の上流部においての洪水を誘発して土砂の流入を行い、下流部の客土としたことが伝えられている。つまり、洪水を利用し、土地形成だけでなく、作物の栽培管理まで行っていたことになり、水との戦いというよりも水と共生してきたということになる。

流通経済の拠点としての長島

木曾三川下流域は、米作を中心とした穀倉地帯であることは、江戸時代の各藩の石高からも明らかであるが、全国でも屈指の作物の集散地としての位置づけもある。近年まで物流は陸上交通よりもむしろ舟運に負うことが多かった。江戸期でも全国で盛んに河川の掘削が行われ、舟運が物流の主流であったし、昭和になっても物資の輸送のためには伊勢湾と若狭湾を結ぶ運河が計画されたりしていた。しかし、中世においても木曾三川は、中部日本においては、流通の大動脈であった。当時の詳細な資料は、現存していないが、木曾三川の流域面積は現在とほぼ同じの四国の半分ほどの面積を占め、相当な山間部まで舟運があったことは間違いなかった。例えば、筏などは冬季の積雪を利用し、山頂付近から切り落とされ、筏場で組み立てられて、下流まで運ばれてきている。その間に中流域においては川港が発達し、船頭の入替えなどが行われたが、最下流においては、船頭の入替えだけでなく、筏の組み替えも行われており、一枚のいかだがもたらす経済的効果は小さくはなかった。また、舟運では山間部や中間部で収穫された産物が河口付近に運ばれてきており、それらが河口では海舟に

積み替えられることにより、物が動き人が動くことは多大な経済効果があったと思われる。なお、川舟は上流に向かって帰る際には、より軽いものを乗せる必要があったため、河口部で作られた灰が船倉に積み込まれ、上流部(山間部)での肥料として用いられた。これらの理由で、河口に位置する長島は、河川と海を結ぶ重要な接点であり、舟運の発達により中流部での川港以上に多くの物資が運び込まれ、経済の重要拠点となっていた。

一向宗と長島願證寺

一向宗とは、浄土真宗を含む一向念仏を唱える宗派の総称で、現在のような明確な宗旨や宗派の区別はなく、浄土真宗自体も数多くの宗派に分かれており、伊勢国においても中勢には同じ浄土真宗の高田派の本山である専修寺があり、大きな影響力を持っていた。この地域における浄土真宗の教勢拡大は本願寺派の8世の蓮如によるところが大きい。特に長島では、願證寺誌によれば、その開基は蓮如の子の蓮淳とされるが、実際には長島町誌にあるようにその以前にかなりの法泉寺という大寺があり、この地方一帯に大きな影響力を持っていたものと考えられる。しかし、蓮淳が入ってからはその勢力は一層拡大され、長島が東西交通の要衝でもあり、舟運における南北交通等の要でもあったため、長島願證寺の重要性は増していった。また、中世における浄土真宗は、寺を中心に寺内町を形成することが多く、長島においても願證寺を中心とした都市を形成していたものと考えられる。このことは、川の河口が重要な経済拠点となっていたことからわかるが、交通と経済・宗教をあわせてみると現在の長島とはまったく違う寺内町長島の存在をうかがうことができる。そして、中世の中ごろは現在の長島城付近において、海岸線があったと推定されることから中世の長島城は、伊勢湾の最奥の河口に広がる干潟に城域の形成があったものと考えられる。ただし、勢陽五鈴遺響によれば元亀元年までは長島城は伊藤重晴という中勢の長野氏の一族が支配していたとなっており、長島願證寺との関係は不明であるが、かなり近い距離に巨大な経済圏が重なっていたものと思われ、元亀元年以降はこれらのことから長島願證寺と長島城は互いに連携を取りながら木曾三川下流域や北伊勢方面を支配下においていたものと考えられる。

永禄年間から元亀・天正年間の長島

いわゆる戦国時代の後期の合戦は、石つぶての投げあいから始まり、弓矢や鉄砲など距離をおいた戦いがあり、やり合戦・組討と距離が縮まっていく。しかし、長島における合戦はどのようなものであったのかは、当時の資料としての信長公記によれば、相当大規模な多々いかが3回以上行われている。戦いでの軍勢の正確な人数はわからないが、信長方だけで一回に5万人から7万人と言う膨大な人数が投入されていることになる。荷駄隊や雑用等の直接戦闘に参加しない人数を除くと、実際の戦闘にはその半数以下の戦闘員であったことと思われるが、木曾三川下流付近の地形を考えると、

例えば、大垣から揖斐川沿いを南下するためには横隊ではなく縦隊で進まなければならなくなり、相当長い隊列(万単位での軍勢であれば数キロに及ぶ)が必要となり、長島に近づくとつれ、側面からの攻撃に対しての対応は、不可能になる。また、岐阜から最短距離の直線で南下する場合は、当事の木曾三川は網の目のように乱流していたはずだから、武器や武具を持つての渡川は軍勢の規模が大きくなるほど困難なものになってくる。その上現在でも長島と岐阜との高低差が 10 メートルほどしかなく、当事は堤防高も現在とは比較にならないほど低かったはずであり、当然大規模な建造物はほとんどない状況であるため、長島の堤防上からはるか岐阜近くまでは見渡たせたに違いなく、現在でも多度山のふもとから十分に岐阜城を見ることができる。このため、濃尾平野の西南部の低平地での大規模な人の動きは手に取るように見えていたはずである。その上、明治の初めの資料でさえ、岐阜から桑名まで船で南下するには 2 日以上かかっており、いかに当時の時間の動きが現在とは違っていても戦闘に対応する時間はかなりあったはずである。

これらのことから長島一向一揆と呼ばれる戦いは、当時の木曾三川下流域を地形から考えて、信長公記に描かれている長島一向一揆の様子が、当時の事実であったとしても、例えば、低湿地帯であった長島周辺での馬の使用は不可能であったはずだし、下流域での島は、砦化しているはずだから、舟での移動は困難を極め、重装備の兵力の移動は難しかったはずである。また、大人数が集まるような広い場所があったかどうかは疑問であったし、一方的な攻撃ならいざしらず、双方が戦いあうような場所は存在しなかったと思われる。つまり、大規模な戦闘が一斉に行われるような場所も、縦横に走り回れるような場所も長島周辺では見つけることができず、現在の映像として見られるような馬に乗って勇壮に戦ったり、武装集団の海戦があったとは到底考えられないのである。

今後、戦国期の合戦を考えていく場合、当時の地形や景観を考慮に入れて考察を加えなければ、実際の時間の経過やその場での様子など現在の地図だけで判断することは非常に危険であり、実態とはかけ離れたものとなる公算が高いのである。



現在の木曾三川下流

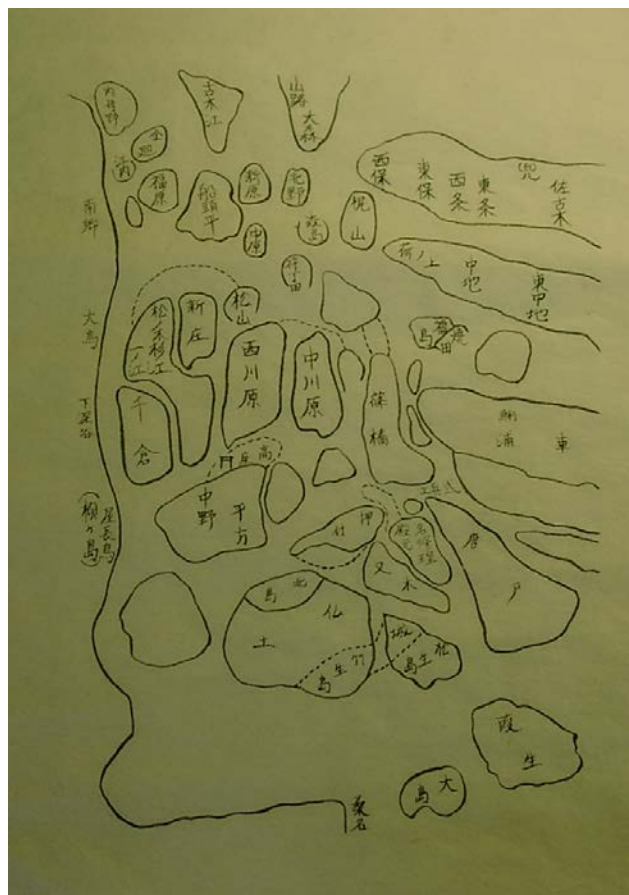
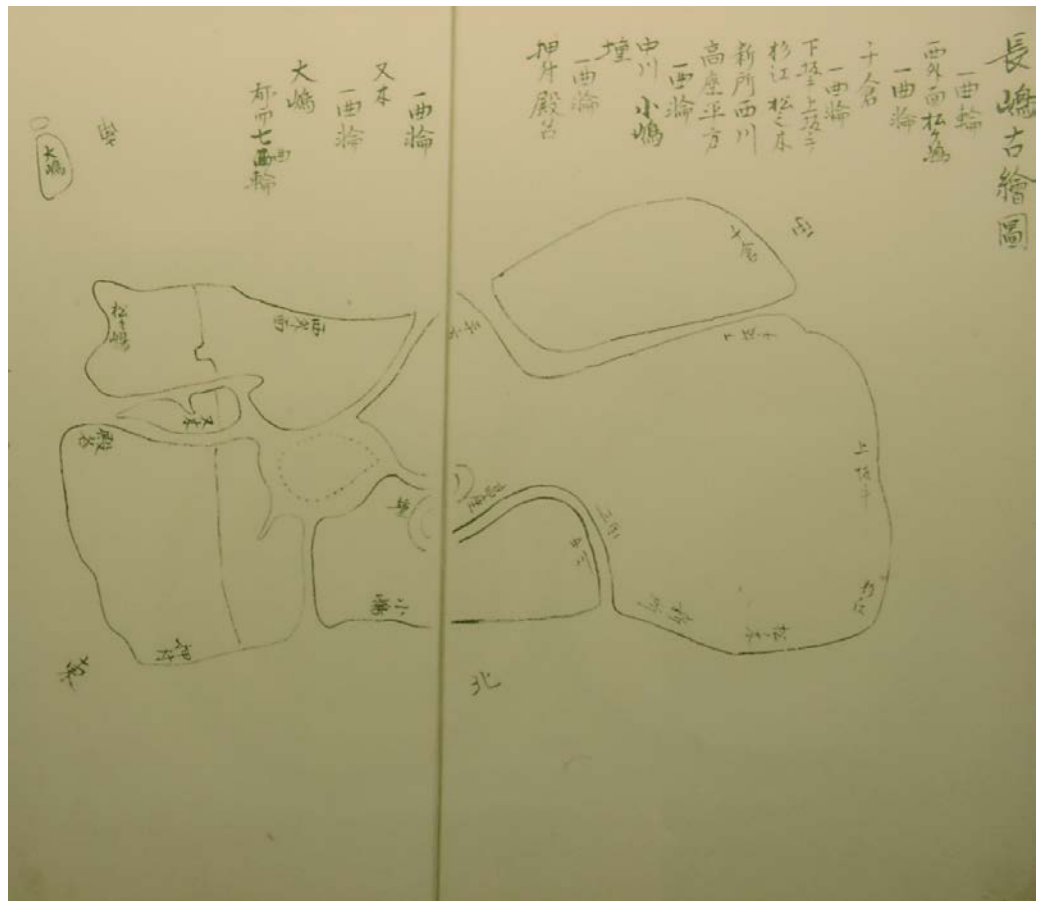
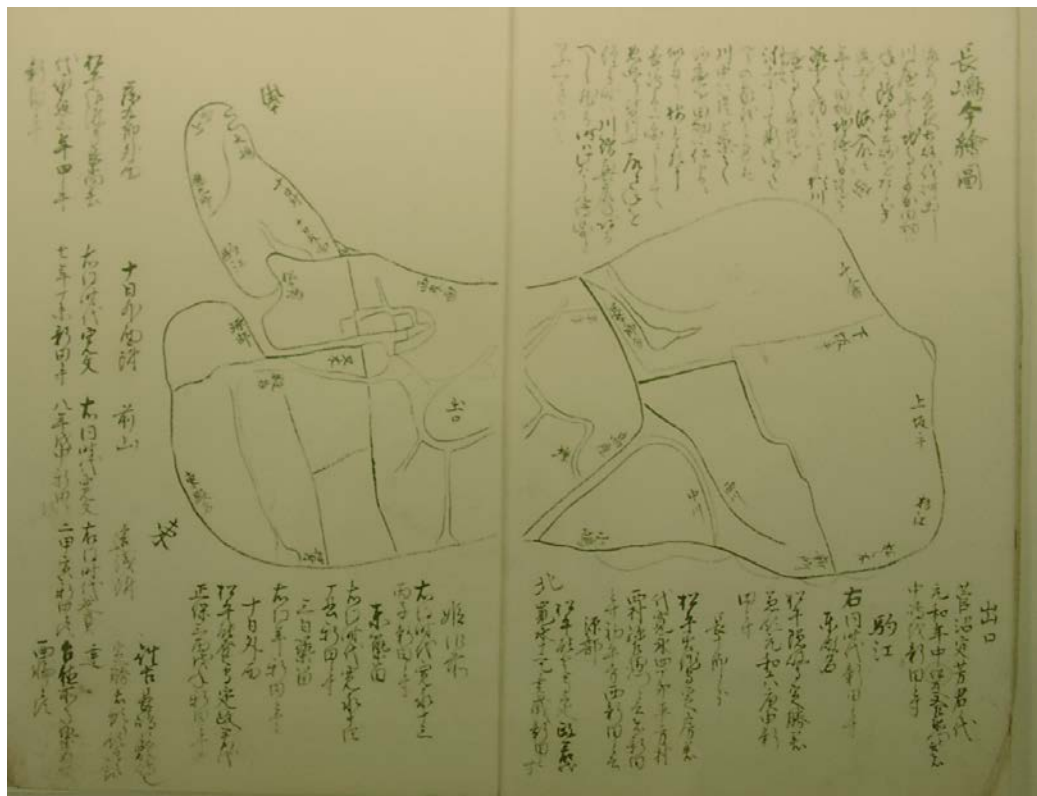


図 1



江戸時代初期の長島絵図 1



江戸時代初期の長島絵図 2



江戸時代中期の長島絵図



勢州長島合戦之図(江時時代)